

小松 龜代吉 追悼

報

誌

頌

1972年4月

目次

朝鉄釘争議のころ(旧稿)

追悼 沢田武雄と私(遺稿)

想い出の人々(旧稿)

一九四八年 才一回西日本協議会の頃

奈良・服部のこと

静岡時代・ハツさんのこと

江東自由労仍組合

大和民労会と爆弾事件

パン略配布

吉 追 悼

小松龜代吉

5

小松龜代吉

8

小松龜代吉

18

河本乾次

22

安田理寛子

24

大塚昇

26

江西一三

29

河本乾次

29

河本乾次

33



同志小松竜代吉・死の前後

今は昔

印象にのこる人と、二つ

晩年の手紙から

故小松君の思い出

チンチン電車と千内と静岡と

思い出すままに

へ 平民新聞列車内宣伝販売の頃、向井孝

旧今宮村の子供時代

■ 後記がわりに……………

# 小松竜代

武良二

山口英

高島洋

寺島珠雄

山口由

志賀しずこ

逸見吉三

36

38

41

42

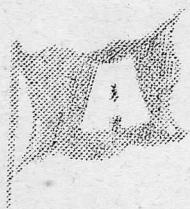
44

45

47

71

77







# 鞆釘釘争議のころ（旧稿） 小松龜代吉

大正二五年一月、黒連の銀座事件のあと、特高の横

暴行策と頑迷な家主の近落戦術に、さすがの野蠻人社の猛者連もついに旗をまいて千住の家を南け渡した。

これを機会にと放浪の旅に出た三上由三と獄にいた村上義博を除いて、私と沢田武雄はさっそく家に困った。丁度近くに八太舟三の家がある。そこへ転がり込むことに勝手に決めて、乗りこんだ。八太は千住の爐せんべい屋の二階で、妻君のわかさんと二人で、四畳半と三畳の、義理にでもきれいだとは云えぬ部屋で、

賀川豊彦あたりから回してもらおうと翻訳で、細々と暮らしていたが、夫婦仲は非常にむつまじかった。当然

二人は当てられ通し。ああ人生は五五の春とかなんとか世迷言をいい、二五才まではあと三、四年ある。いい

ぞという時の為に地方状態を知る必要ありと勝手な熱

をぶいて、沢田の御里、静岡へ都落をした。

当時、富士には大塚昇、静岡には牧野ら二連の人達

清水には山口勝清が小坂千里と立こもっていた。漸次活発な動きをみせていて、沼津、富士、清水、静岡と

連日演説会を開催した。会場はほとんど空いている。劇場を借り、宿泊は同志の家でしたので、赤字になるようなことはなかった。……

大正二五年の末、私は痔疾治療のため大阪の兄の家へ帰り、保養を兼ねた暫居生活中だった。大正天皇の喪。そして昭和二年の四月、山口勝清が突然訪ねてきた。福山へ来ないか、未開の土地だ、新しい所の開拓だ、是非やろうとのことと意見を決して同道した。

福山に居を構え、月刊「解放運動」の発行に着手し

た。そのオー号印刷のため山口が上京中、風の如くに

沢田が出現したのにはびっくりした。当時福山の中国労働組合自由連合会には糸島孝太郎、高木精一らの印



士連がおつて広範な地域にまで組合員を擁していた。しかし備後地方にはうれしという大企業はなく、わずかに福島紡績の工場があるにすぎず、労組組合らしきものはなかったが、工業は盛んな所であった。同志として、吉備に岡田光春が水平社解放連盟員として気を吐いていた程度のもので、青山大学がその後、ときどき三次から訪ねてきた位のものであった。前後転倒したが「解放運動」カー号はもちろん発禁、風采坊奴とさうそく私服がつきまといだした。どうにもいけない、沢田と相談の結果、地下足袋姿も勇しく、昔お江戸で磨いた腕を、芦田川改修工事に掻きにいれた。お陰で張込みはとかかる、地方との連絡はつく、各地から同志は訪ねてくる、鈴木文治等の演説会には十数人の同志とブン壊しに公会堂へとナダレ込むなど、しだいに活発な動きがでるようになった。

昭和二年の五月、朝鮮鉄釘会社の争議応接に手近な福山からと、中国自連の糸島君が依頼にきた。沢田、山口と三人で鞆町の争議団本部で争議団員と宿泊した。

デモ行進中、警官隊と衝突し、公務執行妨害、器物毀棄で検事拘留、福山区裁判所で罰金二十円、釈放されて争議団本部へ帰ってみると大阪製鉄労組の日野正義が来ていた。色の白い、これが製鉄工かと驚くほどの美男子であった。

争議は、会社側と交渉中も、漁村の人達で腰が弱い。一人二人と脱落していく。あと僅かしか残らない。完全な敗北だった。止むなく解散と、残存団員の心尽しの冷酒で解散式の最中、勝ち誇った朝警署警員数名が突如侵入してきた。議論の余地なく乱陣、眼鏡がとび顔手足は傷だらけ、全員検束、日野の投げた煙草が一巡査に突き刺り百日以上の重傷、というわけで敵方にも相当の被害があったらしい。佐々木巡査部長の眼のふちの黒ずんだ顔は殊に印象的だった。

検事が出張してくる。私の顔を見るなり、又やっとな、とニヤリ。養奴、こちらは張切った若さだ、何を聞かされても太々しい、非常に悪い印象を与えたらしい。翌日は日野、山口、沢田と争議団員の沖浦静雄と私





全国自連大会での汎太平洋会議派の除名、伊串英次の

傷害事件、関東の暴行事件に絶望を感じ、その渦中に

巻き込まれたくないとして、岡山、倉敷、福山をつな

ぐ線に止ってしまった。思えば残念な事であった。

それから三十年、日野とはあのまま別れたきり、山口

は広島のパカドンで、糸島も岡田も死んだ、沢田は東

京にいらつしいが連絡がない。皆良しい男だった。五五

の春が白髪氾りの年になり、浮世の風を上手に泳ぐよ

うになった。長生きすれば恥多しか。

(附記) 先年、福山で無政府主義講演会を開催の際、

石川老、小笠原教授と私も同道したが、あの当時に

播いた種が芽を出したと嬉しかった。

(一九五七年七月発行、口ロバ六号掲載)

# 追悼記 沢田武雄と私

(遺稿) 川松亀代吉

沢田武雄は、私より一ヶ月早生れの兄貴だった。ま

た彼の方が良く本を読み、行動的にも秀れてすべての

点で兄貴であった。彼の顔は童顔であった。と共にそ

の心まで童心であった。まっすぐな人だった。

彼は私同様、喋ること、書くことも上手でなが

った。ただ、言葉に表示しえないものを行動によって

何よりも平直にあらわした。別して、権力に対しての

反抗心は徹底的なものであった。







追い出され、こんどは生野進や三上由三らと北千住の  
一軒家をみつけた。

もちろん夜食なんてものはなく、むしろ十五円の先  
家賃の金ができたこと自体が不思議なほどである。皆  
食費で芝汚ない、印伴天婆。どんな家主だってこの妻  
をみたら貧しっこない、ニベもなく断られる。そこで  
俺がカスリの着物に袴なんか付けて、大学生なんです  
が……なんて家主をタブラカして借りてしまったので  
ある。

だが、有金をハタいて家にはありついたが、定取の  
ない者の集りだから、翌朝早く芝浦へ出かける足代も  
ない。無理をしながら北千住や芝浦を歩いて、日雇い  
溜りへ行ったものだ。五人が五人共に合わせることはな  
く、誰かがアブルレルとその晩はお互いの腹にひびいて  
くる。

一月、二月とたつに従って寒さは厳しくなり、歩い  
て行くことが不可能になってきた。丁度ラジオが放送  
され始めた時で、無線は無銭に通じる、てなことをこ

じつけて、たしか三上が云い出して、そばやへの無銭  
放送をよろうとういふことになった。つまり初めから私  
う気がなくて、出前をたのむのである。気のいい君は  
童顔をほころばして、うどん屋や天ぷら屋へ天井とか  
親子丼を注文してまわって、五人が飢えをしのいだも  
のだ。だがお互いに若く、金がなく、腹がへっついて  
も、勉強もよくやった。議論に花が咲き、夜を徹すこ  
ともしよつ中だった。深夜の議論が高潮してくると、  
いつかしら天声となり、最後は革命歌となって合唱し  
たものだった。そして私たち五人のグループを、反逆  
反骨の精神は野蛮人的であれと△野蛮人社▽と名付け  
た。

しかし度重なる放送も限度がある。一度持ってきた  
そば屋やうどん屋は二度と持てこない。米屋はもち  
ろんのこと。炭屋に到るまで敬遠され、どうしても飯  
に喰いはづれた者は、北千住から本所松倉町の曾川豊  
彦のセツルメントまでトボトボ喰いにいく有様であっ  
た。

最初のうちは相手も気もちよくもてなしてくれたが、次第にいやな顔をする。残った着のこたえを考えると、五十銭でも一円でも貰って帰らぬと連中の胃がもたない。何しろ本所から北千住まで歩いて帰るのだから、帰った時分にはもう腹が空いている。もって帰った金で酒を買って、それを喰いながら又議論で夜を徹するという生活だった。

議論の音が大きく、安眠妨害との苦情が近所から出たのが、警察の検挙によい杖会を与えたりしい。無銭飲食を理由に、ある日、五人が寝込みをおとわれ、物の十五疋もあるくか歩かない所の北千住警察署にひっぱられた。

留置所は如何にも昔風な三寸角の格子で、映画に出てくる牢獄の通りだ。たしか村上と沢田と私が同房に入れられた。私が「おい小便だ」と言い出したのに応えて、沢田が「そうだ杖でできた身体ではない。出ものはれもの所かまわずだ。早くこたえを出せ」と喚く。看守と口喧嘩となって、留置所の扉が開かれた。

この看守、あとで聞くに柔道四段だとかで腕に自信があつて、俺が沢田を投げとばして皆の度肝をぬくつもりでいたらしい。やにわに俺の襟をつかんで引っぱり出すとしたところを、向はつをいれずに村上が突然とび出し、その看守を大外刈りで見事に投げとばした。同僚の看守が大あわてで手錠を持ってきて俺につかみかかってくる。ハズミに手錠が俺の前歯に当って二本欠けた。それをみて村上は俺の高足駄で看守を乱打したから、さあ、北千住警察設立以来始めての大騒ぎとなった。医者をよぶやら、一人一人を特高室へつれていってなだめるやら、よつゆく騒ぎは納まったが、納まらないのは村上。公務執行妨害、傷害で警視庁から裁判所へ、そして二ヶ月の徴役を言いわたされた。

北千住での野蛮人社の御乱行には、警察側としても見逃すわけにもいかず、さりとて無理にひっぱる訳にもいかず、随分困ったよつで結局は家主を犠牲にしていくばくかの立退き金を渡すから北千住から出て行つて欲しいと多協案を持ちこんできた。



この時分・出獄したばかりの堀田昇一がごろごろんできていた。彼が支の増上寺前で水を車に入れて撒水していた当時・俺らは良く話しこみに行ったが、そのうちがけを喰って引上げられたノートの内を書いたであったのが不敬罪とかで八月ほど入獄していたのだった。

そしてこの警察との交渉を受けもったのが、堀田で何んと話したのかわからぬが、二十円程の金を先金にとり、三上と君と私に渡して、その金で私たちは伊豆の大島へ渡るようになった。そしてそこで決着をつけた堀田の采るのを待って、野車人社用建を相談する約束だった。ところが堀田はもちろん、金さえも送っていない。たちまち宿賃には困る。ましてや大島の如き他国では金のつくりようもない。

三上は差木地へ、君は宿に残り、私は宿屋から船賃を借りて、金を作りに東京へいくことになったが、もちろん東京へ行ったらとて金のできるはずもなかった。ええい、まあ何とかなうつという気持ちで北千住へ

いったら、幸か不幸か、北千住の新聞勧誘員の藤井がトツツクにはねられて、賠償問題がこじれている処だった。

こちらは少しの金でも作って、大島へ送らねばならない立場にある。渡りに舟と、文秀を買って出た。しかし越ヶ谷の農家だったが、越ヶ谷についたのが夜の九時ごろ。その当時とて、どこもかしこも真っくら、たずねる人もない。一、二軒しかない旅人宿さそ戸を叩いても開けてくれない。ままよ、警察で一泊と決めこんで、宿を世話しろと話しこんだが、「この夜更に宿屋も起きてくれはせんよ。何んならうつで泊っては何？」と言つのをまぢかねて、巡查の詰所で一泊した。田舎の警察はノンキなもので、留置人も二人位だ。夜中に、刑事が昔の十手を持ってきて、「君、これを知っているか？」とやってくる。こちらは夜露さそしのげればいいのだ。逆うちことはない。うん、うんと聞きながして一夜を明し、場所をおしえられて交渉相手の農家へ行き、半日ほどねばって金を手に入れた。



さうして、その内から若干を大島へ、残り廻り廊下付二階建の家を借りて、新聞勧誘員の庫中とそへに住みつくことになった。まもなく君も大島から帰ってきた。八太郎三が度々来てはしゃべったり講議してくれたし、又、良く酒ものんでさわいだ。新聞勧誘員の諸君は漸次脱落していったが、警察相手に喧嘩することや、怒鳴りこみに行くことが魅力だったらしく、一時はたくさんあつまつた。

しかしまもなく、警察が介入し、北千住管内から立のく約束のもとに、立のき料をもらって、そこは解散する事になった。荷車を借りて、君と私と二人でひき、村上の後押しで南千住附近をとうると、一度手頃の家がある。これ幸いと荷物を持ちこんで掃除をやりはじめたところ、北千住署の特高、飯野が巡査部長に昇進して、巡邏中に見つかった。

君と二人、南千住署へ荷車諸共に引っぱられて、一晩検束された。翌日、広海蔵一と村上が南千住の署長に抗議して釈放されたが、もはや家を借りる見込みは

立たず、いたずらに荷物が邪魔になってきて仕方ない。古道具にたたまき売ってそれから、本所の斎藤乳らの地獄寮に泊りこんだり、黒旗社に転がりこんだりしたが、終始君と何時も一語であった。

その年のメーデーでは、神戸の中村一、宇治一郎と君との四人、湯島天神で落合い、小川町の街頭からピロをメーデーの行列にバラまいて、南錦署に検束の帰路、日本提署で二十日の拘留をくった。迎えにきてくれた小林辰夫の世話で、時事新報社の拡張勧誘員として集団就転した。その二日目の夜、新橋隣の宿屋に泊っていた十数名の拡張員のなかに、新橋で喧嘩をして店をこわした奴がまじっていた。それが果して誰れか判らぬままに、全員が愛宕署に拘引されて調べられた。その結果、偽名がバレた。で、二十九日の拘留。

二ヶ月間にほんの二、三日世の中を見ただけ、あげくには新聞紙法違反で二十円の罰金、と踏んだりけたりの有様であった。しかし、時事新報社へとなりこんで話をつけてくれた同志によって、月給を警察の司

法主任室で受けよる様子を「しまった」。

また行きかまがなくなつて、ハ太舟三の所へつらつら  
こんだつてもまゐる。その頃、ハ太舟三は若い妻君のお  
若さんといふブルームの二階二回の部屋を借りて、アナ  
キズムの著作やら翻訳やらをひたひたにかんがつていた。

その中へ割りこんだ無業者二人には、さぞかし迷惑  
したつたらしい。だが即ち俺たち若い者の面倒も見、  
一語に酒を呑んで、黄色い舌で「恋はやさし」「なん  
て明つてくれて、結構楽しんでおくれ」つたものだ。し  
かし、いつまでも世話をかけているわけにもいかず、  
しばらく東京をばなれた生活も又良からうと、無銭旅  
行に出かけることに相談が一決した。

いつも決まるのも早い、実行するのも早い二  
人だ。何がしかの金を握つて、ハ太さんの米櫃に米を  
入れて、無断でとびだした。目標は君の郷里の静岡だ  
つた。九月のはじめの太陽は、直感には垢けない。夜  
行しては昼間は山林でねた。中村武羅夫から小使いを  
せしめたり、小田原では教会に泊つたりした。「社会

主義者は嫌いです。あなたたちは社会主義ではないで  
しょうね」と断りながら泊めてくれた牧師の奥さん。  
熱海では九月十六日、大杉の殺された日だと言いつら  
激しい雨足に、海岸の露店に雨をさけて、半日も足を  
止められたこともあった。

沼津の若山牧水定前の積葉の中でねたが、夜中に虫  
がはい廻つてねむれず、あれ程夜明けが長かつたこと  
はなかつた。早朝、海辺で大を連れて散歩している若  
山牧水をつかまえて、「論議吐いて幾冊かの雑誌と静  
岡までの汽車賃をもらつた。そして腹いっぱい飯を食  
つたことなど、君もきつと覚えていようだろ」。

清水の山口勝清君の所へ着いたが、誰一人いない。  
上りこんで、米一升と鯖を買つてきたのを煮て、二人  
でぐつぐつし、何時の向にやらねこんでしまった。帰  
つてきた山口が二人の顔色が悪いので、大へん心配し  
たとのことだった。

丁度、清水から富士、沼津と演説会を催おさうと考  
えていたところだと大喜びされたが、お互いにしや



ぐるぐろが大へんキライな二人。でも、どうせ演壇に上ってもすぐ中止になるんだと腹を決めて、よし大いにヤロウと返事したのだ。

清水では予定通りすぐ中止、解散となって、ほとんど全員が検束された。東京から来援した若佐老人なんか、無理矢理所持品をとられたのだから、警察は強盗だと大声でわめく。皆さんもそれに合わせて革命歌を叫ぶ。こんな大騒ぎはまさに清水警察署ができて以来初めてのことであったろう。

警官は唯々おろおろするばかりだが、翌日は一応釈放という名目で表まで出して、又引っぱりこんだ。

むかえにきた望月辰太郎君が、「おい、あの辻こそ次の辻にへ私服が二人づつはっているから、反対側から逃げる」とおしえてくれる。その通り、下駄を両手でぶり回して、三ツ辻へらい逃げたが、警察本部の応援で、全員、再び豚箱入りだった。

富士や沼津ではそんな検束騒ぎは出なかつた。そのおかげで、演説中止と早く言ってくれないかと気がか

かって、顔の赤らむことがあったり、吃ったりした。

演説会ののち、静岡の本通りで二階建を借りて落ちつくことになり、山口勝清が紹介してくれた清水の鈴与商店の興さんから二百円出してもらった。それで下型フォードのセコトラックを運転手ごとゆすりつけ、白竜号と名付けて砂利運びを始めた。運転手の風間君は勿論こんな無法なやから共の集りとは知らなかつたろうが、いつのまにか共鳴してくれて、今度の沢田武雄君の追悼会にも出席してくれた。予定では、七往復もすれば充分採算はとれる。人手は静岡や東京からきた陣中で有り余る寸法だという寸法だったが、何事も計算通りにはいかない。タイヤがパンクしたり、採砂利の場所がない。予定より走行路が遠いと、七往復は愚か四往復も、時によっては三往復もできない。私が炊事をやって起き起す役目であったが、何としても皆が起きないので炊き上げたぬる汁をゴミ箱に投げ捨てて、皆さびっくりさせたこともあった。

女友達も三人、四人とあつまりまるとなつて、数



前死んだ俺の女房も、その時一諸になった訳だった。君もなんとかハルミと言う娘と仲良くしていたが、乗名哲夫と鈴木重宝とその娘のことで喧嘩したあげく君は兄さんの所へ行ってしまうといふこともあった。

結局は武家の商法。社会主義者の言葉、世間は甘いもんではない。俺が藤尾清三郎君と関西旅行をしているうちに、とうとう自動車は解体、ボンゴツ屋の表にさらし物になってしまった。その次は音羽町での新屋と、転々と商売が変わった。(いつも庇護してくれたのが、大塚昇君だった)

浜松の急務大争議の時は、大塚君と三人で名古屋まで出かけたこともあったが、やはり、いつとはなしに静岡へ帰り住むようになった。

俺が馬淵の家を借りた時は、本当に困りきっている時だった。女房と二人でねる布団すらない。君は兄貴の所から布団を、大塚は茶碗や木箱の食卓を工面してくれたといふ。いまだにありがたみおぼえてゐる。

長男の風太郎が生まれた。が、わずか十数日の命であ

った。その葬儀も、君や石川金太郎君や小林辰夫君らで済してくれた。勿論、坊主がくる習もなく、死体を箱に納めて自転車で曲金の火葬場へ運んでくれた。考へるとあれからも四十一年になる——

戦争をへだてていつしか音信がとどきた。

みんなばらばらになって生き、俺は大阪でくらすようになった。

お互いの消息がわかり、一九六五年一月三日正午、静岡駅で出あひ約束をしたのが、戦後はじめての再会であった。

俺は前日から福森さんの家で泊り、君を駅頭で待た。君の童顔は変わらずと言ふ、三十分近くスレ違つてようやく君の手を握った時のつれしさ。本当にあの晩は乱子も騒ぎに終始した。酔がさめて指を折ってみると丸軒ぐらゐを呑み歩いた様に思ふ。

その時、君の痔の出血は相当に激しく、酒好きの俺が「おい、酒をもう少し減らせ」と言ったことや、お互いに六十の歳を越したこのごろ、徒らに大きなこと